

ミカワイヌノヒゲ *Eriocaulon mikawanum* Satake et T.Koyama

【評価理由】

個体数階級 1、集団数階級 3、生育環境階級 4、人為圧階級 2、固有性階級 4、総点 14。本地域の固有種とされる植物で、生育地が狭い範囲に限られている。

【形態】

1年生草本。茎はごく短い。葉は束生して斜上し、線形、長さ 2~9cm、幅 1~2mm、全縁、先端は細くとがる。花期は 8~9月、花茎は多数つき、長くても 15cm 程度、基部に 1~5cm の鞘があり、密に生育している個体でなければ中央の 1 本だけが直立し、他は外側に開曲し、先端に 1 個の頭花をつける。頭花は小さく、直径 1~3mm、総苞片は披針形で、頭花の 1.3~2 倍である。小花には多少なりとも白色の短毛がある。子房と蒴果は通常 2 室が退化し 1 室となるが、稀に 2 室が発達する。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：11 作手 (芹沢 94667, 2018-10-2)。西：28 額田 (小林 53452, 1994-9-3)。作手では旧村内の 3 カ所の湿地で確認されている。

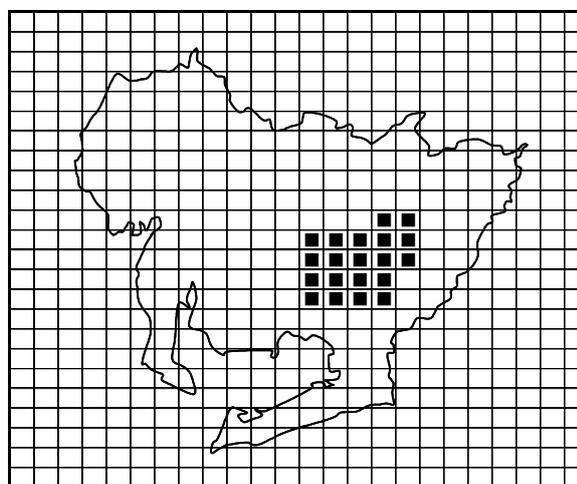
【国内の分布】

本州 (愛知県)。

【世界の分布】

日本固有種とされている。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山間部の湧水のある湿地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地	○			
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

生育地は良好な自然湿地に限られているが、そこでは個体数は多い。過去の湿原開拓の際には大きな影響を受けたと思われるが、近年に限れば小康状態である。

【保全上の留意点】

旧作手村には多数の湿地があったが、その多くは開拓等により埋め立てられ、良好な自然状態のまま残存しているものは僅かである。現在残存している湿地は、大小を問わず、注意して保全する必要がある。

【特記事項】

愛知県の固有種とされているが、イヌノヒゲ *E. miquelianum* Koernicke は形態の変異が著しく、本種の特徴とされる形質は全てその変異内に収まってしまう (芹沢 1992)。おそらくはイヌノヒゲの極端型にすぎない。ただし、全形質の組み合わせがミカワイヌノヒゲと同じものは、作手村とその周辺以外では発見されていない。

【引用文献】

芹沢俊介. 1992. 愛知県および岐阜県東濃地方の丘陵・低山地における湿地性植物の現状 p.110-114. 愛知教育大学生物学教室, 刈谷.

【関連文献】

保草本Ⅲp.181, 平草本 I p.79, 平新版 1 p.284, 環境省 p.559, SOS 旧版 p.98, SOS 新版 p.63,65.